

「嵐を静める」

副牧師：松坂 政広

<マタイによる福音書 8章23節~27節 新共同訳>

- 嵐を静める

イエスが舟に乗り込まれると、弟子たちも従った。そのとき、湖に激しい嵐が起こり、舟は波にのまれそうになった。イエスは眠っておられた。弟子たちは近寄って起こし、

「主よ、助けてください。おぼれそうです」

と言った。イエスは言われた。

「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」

そして、起き上がって風と湖とをお叱りになると、すっかり凧になった。人々は驚いて、

「いったい、この方はどういう方なのだろう。風や湖さえも従うではないか」

と言った。

<メッセージ>

今朝の聖書の箇所は、物語は、何を言わんとしているのでしょうか？なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。があまりにも強烈なので、弟子たちの、わたしたちの姿勢が問われているのかとついつい思ってしまいますけれども。ずばり、主が嵐を静めてくださる！主は嵐を静めることのおできになるお方だ！ということですよ。この場面で、主は死ぬかと思うほどの嵐を叱りつけると、凧になった！ということですね。物理的にも精神的にもわたしたちの人生でこのような嵐に遭遇して、主が嵐を静めて下さるということに思いをいたすというのが今朝の福音のメッセージになります。

起

今朝の聖書の箇所は、従来、起承転結で読まれてきたかと思います。起承転結の起は、イエスさまが舟に乗り込まれて、弟子たちも同行しました。従ったというよりも、同行したという方がピンときますね。一連の経過を弟子たちはイエスさまと共にした。その全貌が読者の目に見えているということですよ。丁度その折、ガリラヤ湖は激しい嵐に見舞われて、おそらくは舟に一行が乗り込んで、しばらくしての天気急変だったのでしょう。舟が大変な状況になっているのに、何とイエスさまは眠っておられたという。ここまでが、

起ですね。そこで、承は、弟子たちがイエスさまを起こして「主よ、助けてください。助けてください。というより救い出してください。ですよね。おぼれそうです。は、死にそうです。ですね。原語にはそう書かれています。ところが、転は、この当然のリクエストに対して、イエスさまが弟子たちを叱責されたと理解されてきたので、転ということになる。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」そして、結が、イエスさまが嵐を静められた。この人は一体何者なのか？ということですが。

今朝は、これを、「起承承結」で読んでみたいと思います。つまり、イエスさまが弟子たちを叱責されたのではない。「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」が、弟子たちの当然のリクエストを叱責したものではない。むしろそれを受けとめて主がどこへ彼らを導こうとされたのかを読み取って行こうと思います。

これは、ガリラヤ湖を見つめる副牧師の後姿ですね。世界一のカメラマンが撮ってくさったのですが。この日、わたしたちは、舟に乗ってガリラヤ湖を渡ることになります。渡った先には、イエスさまの時代の舟がキブツに展示されていました。その舟の殆ど部分はヒマラヤ杉で、ヨコの部分はカシの木で、できていて。他にもすずかけの木、かえです。松の木とかで作られていたみたいですね。近くにはペテロの実家があり、イエスさまが聖書を説き明かされたシナゴーク、会堂もあったのですが。同時代の日本の舟でしたら、小金井公園の東京都郷土資料館に行くと目にすることができます。わたしたちが舟に乗った日のガリラヤ湖は、およそ琵琶湖の6分の1の大きさのガリラヤ湖は、とても穏やかで、嵐の度合いを表わす9段階のレベルがあるそうですけれども、その日は、1でした。おそらく今朝の聖書の箇所は、その真逆の9だったと思われま。弟子たちが、死にそうです。と言ったのですから。

イエスさまは眠っておられました。それは、イエスさまにしかできないことでした。わたしたちが嵐に遭遇している時に、イエスさまが眠っておられるとは、どういうことでしょうか。どういう意味でしょうか？嵐の激しさとイエスさまが眠っておられたこのコントラスト、あまりの対比が意味していることは、少なくとも、わたしたちの動揺とイエスさまの動揺に大きな乖離がある。ということですね。これは、うれしいことです。わたしたちがどんなに大変な状況にあっても、動かされないお方がそこにいてくださる。これほどの安心感があるのでしょうか。わたしたちが、人生で、生活の中で大変な時こそ、イエスさまは動じずにいてくださるのです。これが、起承承結の起です。

承

死にそんな嵐に遭遇したのですから、その動揺がマックスであったのは当然です。湖は大荒れとなり、舟は大波をかぶって、波にのまれそうになったのですから。

そこで寝ておられるイエスさまを起こして、「主よ、救い出してください。わたしたちは死にそうです。」と訴えました。この行動と言動がしごく全うであることを否定するのは、何もありません。イエスさまに同行したことが信仰であれば、どんな嵐の中でもイエスさまに救出していただくよう叫ぶのがまた信仰です。あわてふためいた弟子たち

が、寝ておられるイエスさまをそれこそ揺さぶり起こして、窮状を訴えています。この叫びは、あのあまりにも有名なイエスさまの声を引き出すことになりました。

承（転）

「なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。」なぜ怖がるのか。というイエスさまの声は、どうしたことだったのでしょうか？なぜ怖がるのか。とイエスさまはどんな感じで言われたのでしょうか？叱責しているという理解だとすると、それこそ、怖がらずに、どうしろというのか。どうしたらよかったのか。となるわけですけれども、その問いは当たらない。むしろ声をかけられた人が、文字通り、どうして自分は怖くなったんだろう。何を恐れているんだろう。弟子たちに、自らにその問いを向けさせようとされた。いや、そんな場合じゃないでしょう。ですか？怖がっていることを責めているのではなくて、わたしたちがどうして怖がるのかに眼を向けられたら、ことばを変えれば、イエスさまが同行して、イエスさまが動じていないそのお姿が何を意味しているかに眼を向けさせて、このお方は、自分たちをどこに導こうとしているのだろうかになるんじゃないでしょうか。

なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。と呼びかけることで、イエスさまは、どこに導こうとされたのでしょうか？この一連の出来事の中で、唯一イエスさまが語られたことばですよね。

大小を表わすことばをわたしたちは時に耳にします。キロといえば1000倍、メガといえば100万倍、ギガといえば10億倍ですか。一方1000分の1がミリ、100万分の1がマイクロ、10億分の1がナノですね。ナノ洗浄という、洗浄成分がナノレベルまで分解して汚れを落とすというんですよね。たんぱく質の大きさは10ナノメートル、DNAの直径は2ナノメートル、わたしたちの体はこのナノレベルの大きさのものでできている。それらが働いて生きていますよね。ですから10億分の1という小ささにも働くというのですけれども、どんなに信仰が小さくても、信仰が薄くても、このイエスさまが導こうとされたところに眼を向けさせていただけるならば、神の出来事の証人とならせていただけるのですね。

結

イエスさまが、嵐を静められた！このことは、驚きをもって人々の間に広まって行きました。

イエスさまという方は、ご自身の民を罪と死と滅びから救い出すという、この一事の事のために下ってこられました。あの嵐から弟子たちを救い出すことこそ、イエスさまがそこにおられた目的でした。そして、主イエスを信じるすべての人が、このお方は、嵐を静めることができるお方なのだ！と確信すること、そこにわたしたちを導こうとされたのが、今朝の物語ということになります！